は異つて居る點などから、ラシッドウッドヂンの此の記事との間に、相關する所があるのではないかといふ樣な考を有したけれ共、勿論こゝに記さるゝサマルカンド人町が、何れの地に相當するかを確實に證明し得たものはない[9]、有名な阿合馬（アハメッド）がシャルキヤ（Sharukia）の人であつたり[10]、牙老瓦赤（エルワチ）がウルゲンヂ（Urghendji）の人であつたりすることは好く知られて居ることであるが、かゝる有樣は支那でいへば隋唐の時代に當る突厥の時にも既に見らるゝことであつて、從つて其の地方の産物なり、風習なり、またその言語の如きは、早くも此の時代から漠北の地に傳へられたものがあつたであらうと思はれる。更に自分をして考を進めしむれば、かゝる有樣は遙に尙以前に溯り得るもので、兩者の政治文化の諸方面に於る關係は、非常に古き時代にも之を求め得ることゝ思ふ。たゞ確實な記錄の之に伴ふものなく、遺物の之を證するものがないので、明白に之を說き得ない譯であるが、少くとも兩者の諸種の方面に於る交涉の跡を尋究する際にはかゝる考を背景として有することが必要であらうと思ふ。

註① R. Gauthiot, Notes sur la langue et l'écriture inconnues des documents Stein-Cowley, J. R. A. S., 1911 (April), pp. 497–507.
A. Stein, Serindia, chap XVIII, Sec. IV. etc.
② P. Pelliot, Cha tcheou tou fou t'ou king. J. A. Janv.-Fév. 1916.
③ Barthold, Christentums in Mittel Asien, S. 13–14.
④ P. Pelliot, Cha tcheou tou fou t'ou king, J. A. Janv.-Fév. 1916.
⑤ F. Hirth, Nachworte zur Inschrift des Tonjukuk, S. 129.
⑥ 前出②參照。
⑦ F. W. K. Müller, Ein iranisches Sprachdenkmal aus der nördlichen Mongolei, Sitzungsber. der Berl. Akad, d,